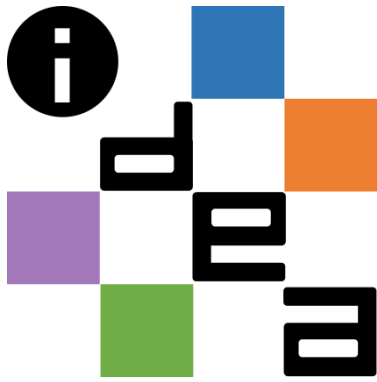


NPO・行政・企業・地域の情報発信により、アイデアと出会いの機会を創ります。

ニュースレター アイデア



2017

8月号

つながり×ひろがる

いちのせき市民活動センター



- | | | |
|---|---------|-------------------------|
| 2 | 二言三言 | 父親の子育て参加と組織運営のかたちを学ぶ |
| 4 | 団体紹介 | 室根神社祭「マツリバ行事」襲先陣保存会（室根） |
| 5 | 地域紹介 | 一関 第6民区親交会（一関） |
| 6 | 企業紹介 | 看板屋・なんでも企画（川崎） |
| 7 | センターの〇〇 | センターの自由研究 一関市の長屋門① |

父親の子育て参加と組織運営のかたちを学ぶ

対談者 On Sunday (s) 代表 工藤 正隆 さん
聞き手 いちのせき市民活動センター センター長 小野寺 浩樹

父親支援で始めた絵本の読み聞かせ

【小野寺】市内で子どもを対象とした読み聞かせ活動を行っているOn Sunday (s) (以下「オンサンディズ」) さんですが、まずは活動を始めたきっかけから教えてください。



オンサンディズ
代表 工藤正隆さん

【工藤】一関市のI can 講座から始まり、1年目に元気な地域づくり事業の「Let's イクメン講座」、2年目に「Let's 絵本ライブ講座」を受けました。講座を通して知り合ったメンバーで「僕達で何かできればいいね」と話をしていたんですが、そんな時に東日本大震災が起き、メンバーが各々で被災地支援をしていたんです。

【小野寺】1年目に講座で子育て中のお父さん達と知り合い、活動の仕方を考えていた時に震災が起きたのかな？

【工藤】はい。その時はまだ「オンサンディズ」という名前はなく、組織をつくったのは震災1年後の2012年の3月でした。被災地支援をする上で、個々で活動するには限界があるし、信頼を得るためにも、活動の資金を扱っていくためには団体名がほしいということで。その頃は、被災地で活動するためにどうするかという手段の一つが団体をつくることでした。元は学ばだけのメンバーでしたから。なので、講座で学んだことは各家庭で実践すりゃよくて、別にそれを地域で何しようっていうのはその時はまだなかったんです。

【小野寺】そうだね、元々は個人のモチベーションを高めて、自分の子どもと向き合おうとか、子育てを楽しもうといったところが目的だったんだもんね。今でこそ一関市内での活動が主だけど、元は被災地支援をするために立ち上げた団体だったんだね。

【工藤】メンバーの中には、当時公民館職員だった方が何人かいて、その関係で公民館での読み聞かせの機会をつくってもらったり、保育園や図書館でもやってみたり、その時あたりから市内での活動が主になっていったんですよね。

【小野寺】チームとして動き始めた時はどうでした？

【工藤】動き出してからは新聞にも載せていただき、おかげ様で間もなく色々声をかけてもらえるようになりました。でも、活動は月2回までにしようねと制限をかけたんですよ。それ以上やると「何よ人の子ばかり見て！うちの子は見ないの？」って奥さんに怒られちゃいますから（笑）オンサンディズにはミッションがあるし、“ワーク ライフ バランス”よりも“ワイフ ライク バランス”の実現もあり、そういう風にならないよう活動回数に制限をかけました。“身の丈に合った活動をし無理はしない”と。

【小野寺】じゃあ、メンバーがチームに縛られる感じもなかったんだね。

【工藤】全くないですね。

【小野寺】オンサンディズができ、新聞等で「現役のパパサークルができました」なんて報じられたけど、「お父さん達の子育て」を全面的に打ち出したのは、一関ではそれが初だったんじゃないかと思うよ。お父さん達の絵本の読み聞かせという部分では今までにないジャンルをつくったと思うし、男女共同参画で「父親の子育て参加・参画」と言われている中、実際にちゃんとやっている姿を見せつけてくれたんじゃないかなって。

【工藤】「父親の子育て参加・参画」と言いますが、僕の感覚的には、40代、それ以下の男性の子育てはかなり積極的になっていると思います。不思議なのは、活動を応援してくれる人しかいないということです。

ね。月2回の活動も、売り込みをしたのは最初の少しだけで、勝手に集まってくれるし声もかけてもらえる。最初2年間は市から助成金をいただきましたが、そのほかにも、とある団体さんから10万円分の図書カードをいただいたり、色々なところから活動資金を支援してもらって。本当にありがたいですよ。

【小野寺】すごいね～！なかなかないことだね。高額じゃなくても、ちゃんと活動できるくらいの支援があったのはすごいよ。



【工藤】そうですね。僕はオンサンディズを立ち上げてよかったと思うし、自分達はすごく楽になりました。

「継続しない」という組織の在り方

【小野寺】今後についてどのように考えてますか？

【工藤】僕達はできることしかやらないので、団体としては続けば続いたらいいし、なくなったらなくなったでいいと思っています。それが時代とかその時の自分達の忙しさ、家族とか環境に合っていれば、別にいいと思うんですよね。目的は変えないけど、手段は変えてもかまわないし。

【小野寺】「無理しない」とか「身の丈に合わせる」という部分はすごく大事だね。前に工藤さんは「自分達は後継者を育成してまでも会を維持していきたくない」と言っていたけど、その中で1つ「お父さんの子育ては期間限定である」というのがあったよね。

【工藤】そうですね。今活動に関わっている現役パパ達の子どもも、いずれ絵本の読み聞かせをする年ではなくなるし、ある程度の年齢になれば巣立っていくでしょうし。その期間が終わったら僕達の任務も終わりと考えています。団体を維持するために、若いメンバーに「組織を継承してほしい」ということはしたくなくて、同じようにやりたい人がいれば、別の団体を立ち上げてやればいいと思っています。

【小野寺】組織をつくれれば「組織を維持していかんきゃ」という思いが出てくると思うけど、オンサンディズではそれに重きを置かないというのが、初めて聞いた時に「なるほど」と思ったよ。

【工藤】自分の子が今小学5年生なんですけど、僕が本を読んであげなきゃいけない時期が終わってきているから、僕の中でだんだんと当事者意識がなくなっていくんですよね。別に僕が読まなくても子どもは勝手に本読んでるし。小さな子がいる家のパパさんとは、そういう意識の温度差がありますよね。

【小野寺】期間限定の活動っていうのはありだなと思ったし、その視点を持っている工藤さんってすごいなあって思いますよ。

【工藤】オンサンディズのために自分達がいるんじゃないって、自分達のためにオンサンディズがあるだけなんですよ。

【小野寺】その視点もすごく大事ですよ。

【工藤】そもそも、僕達の活動は子ども支援ではなく父親支援なので。父と子のコミュニケーションの仕方を考えますが、それは絵本の読み聞かせでなくてもいいんですよ。キャッチボールでも何だっていいんです。家庭の中で「お父さんにこの本読んでほしい」とか「本を読んでもらって喜んでたわよ」とか、そういう会話が生まれればいいなと思ってやってます。



読み聞かせでは、子どもと一緒に親も楽しめます

【小野寺】そうだよね。そういう視点や考え方がオンサンディズにすごく学ばせられるところだと思っています。今までの「人を集めて組織化させて」というやり方より、自由な集まりをつくって姿形を変えながら活動していくとか、期間を決めてステップを踏んでいくとか、そんな風にならなくていいのかな。

「オンサンディズ」という組織は子育てを充実させるためにつくった組織だし、子どもの成長と共に、読み聞かせが必要な時期が過ぎればその役割を終える「期間限定」という考え方、そういう発想は今までにないと思うし、すごくよい問題提起を社会に投げかけたなって思います。

基本情報

【On Sunday(s)】

岩手県一関市の父親を中心に結成した絵本ライブチーム。楽器や歌を交えて「絵本を使った子どもとのコミュニケーション」をモットーに活動しています。

TEL 090-4478-9433(代表 工藤)

団体 紹介



「褒先陣」行列の様子

～基本情報～

- ◆会 長：千葉 繁美 しげよし さん
 - ◆事務局長：小山 眞正 まこと さん
 - ◆連 絡 先：〒029-1201
一関市室根町折壁字大里 201-1
 - ◆電 話：0191-64-2347
- ※上記連絡先、電話番号は室根市民センター

「まつりは‘生きる力’‘生きる喜び’」みんなのものへ

2年の検討、足掛け3年で発足した保存会

国の重要無形民俗文化財に指定されている「室根神社祭りのマツリバ行事」。養老2年(718年)に室根山へ熊野の神様が迎えられたことを記念する祭りで、平成30年には1300年祭が開催されます(※)。

この祭りの大きな特徴として、各種役割が先祖代々の世襲制によって受け継がれており(熊野の神を迎えたときの奉仕者の子孫など)、その役割の数は約60、人数にすると2500人以上にもなるとのこと。家系での継承のほか、集落単位で継承される役割もあり、地域の結束を強める要素ともなっています。

その半面、時代とともに、後継者の確保が厳しくなっている現実も。「信仰心の薄れや金銭的な負担も影響している。昔は名誉だったものが、今では負の遺産とを感じる人もいる」そう現状を見つめるのは「室根神社祭『マツリバ行事』褒先陣保存会」会長の千葉繁美さんです。千葉さんの住む折壁地区が担当するのは祭りの盛り上げ部分である「褒先陣」と「褒まつり」。折壁地区の7集落が担当ではありますが、これまでその取り仕切りは「家元」と呼ばれる家系が代々行ってきました。しかし、家元の家系で後継者の擁立が難しくなってきたことから、今後を見据え、今年3月に発足したのが同保存会です。

「祭りはみんなのもの。新たなつながりの中で良いものを創り出していくことが大切なのは」との思いから、千葉さんが呼びかけ、検討を重ねました。足掛け3年で発足した同会は、54の構成団体の下に実行部隊として「総務」「曲ろく」「行列」の3部会を設け、さらにその元で実際の行列参加者が練習を行うため、総勢100名以上の大所帯です。

「二度とない1300年祭」にむけて

室根神社祭は旧暦の閏年の翌年が開催年であり、2～3年に1度の開催頻度。そのため褒先陣行列の歩き方や道具の作法など、経験者でも忘れてしまうことが多いということが課題でした。そこで、保存会の立ち上げを機に、「毎年何かしら練習の機会をもとう」という声があがり、今年は室根の夏祭りの中で褒先陣行列を行うことになりました。

「20代の新人も加わった。会ができたことで関わりやすくなったんじゃないかな」と千葉さん。順調に見える活動ですが、その活動にあたっては金銭的には文字通りの‘ゼロ’スタート。「切手代すらなかったよ。今は室根まちづくり協議会からも支援をもらい、市民に協賛金も募ることで、みんなでやるものだという意識付けをしていきたい」と、「祭りはみんなのもの」という熱い思いが千葉さんはじめ保存会の根底にあります。「1300年祭は二度とない。この機会に室根大祭を全市のものと位置付けていきたい」と抱負を語ります。

‘活力’をもたらすものとして

褒先陣行列は当日を迎えるまでに必ず20回の練習を持つこととされており、現在夏祭りでの行列に向けて練習の真っ最中。また、行列の練習以外にも、褒先陣・褒まつりにかかせない「曲ろく」と呼ばれる牡丹かたどを模った巨大な造花の製作に「曲ろく部会」が取り組んでいこうとしています。

「祭りは人と人のつながりであり、生きる力・生きる喜びだ」千葉さんの心からの笑顔に、祭りの成功が見えた気がします。



初の試み・夏祭りでの褒先陣に向けての練習風景

(※) 平成30年10月26日(金)～28日(日)に開催

地域紹介



区 長 小野寺司さん

～基本情報～

- ◆区長：小野寺 司 さん（4期7年目）
- ◆一ノ関駅から奥州街道を1kmほど南下。一関南小の北側、台町エリアに位置する一関第6民区親交会（以下親交会）には、258世帯593人が暮らしています。
- ※「地域ではほとんど区長と呼ばれている」とのことで今回は区長と表記します。

「共に支え合う地域」に向かって

共感的な関係づくり

『4時間』それは事前に準備した配布物を、区長が市広報の到着と同時に29軒の班長宅へ届けて回るのに要する時間です。月2回で8時間。決して短くないこの時間には、回覧板と広報の配布を通じたコミュニケーション（挨拶や行事のお誘い、ねぎらいや感謝など）により、区長と班長が共感的関係になることを期待する区長の思いが込められています。

今回は、「区長から班長へ、班長から班員へと続いていく共感的関係の積み重ねや、隣近所の行き来を大切にする意識の向上が信頼となり、『安心・安全・住みよい台町』に近づく」と語る、親交会長であり、一関地区区長会長、一関地区福祉活動推進協議会長など要職を兼任する区長の小野寺司さんにお話を伺いました。

地域を活発にする多面的な取り組み

「自分を育ててくれた恩返しの気持ちでこの地域に10年は貢献する」これは地元台町で生まれ育った小野寺さんが、長年勤めあげた教師生活に定年が訪れた時、今は亡き父と交わした約束だそうです。

そんな背景もあり、親交会の活動に関わるようになりましたが、当時の親交会の活動は比較的下火傾向で、小野寺さんには事務局長としてまず親交会の体制を見直すことが求められました。従来の「部」の解体と、役員構成を「区長・民生委員・保健推進委員・老人クラブ代表・PTA会長」に再編成する規約変更、さらに自主防災会の立ち上げも含めた同時進行での新体制作りという難事業を支えた小野寺さん。その後区長として「地域を活発にするには多面的な取り組みが必要」と、年4回の役員会を通じ、老人クラブ、PTAという幅広い年齢層と情報共有・連携を図り、地域の課題解決や、連携からの新たな取り組みを模索しています。

例えば夏祭りの子供神輿は親子、地域合わせて120

人以上が参加する地域を挙げての活動ですが、練習日の中に1日だけ子供防災講習会を組み込んだり、逆に秋の大人向け防災講習会と台町交流会をセットで開催して、世代間交流や防災意識の向上につなげています。

また、健康3本柱（年間10回の「元気いきいき教室」、毎週木曜日の百歳体操「台町木曜会」、体育の日の「早起き歩く会」）も健康意識を高める要素になっています。こうした老若男女を対象とした多面的な取り組みは、年度当初に日程まで決めて作成される年間予定表と、毎月2回小野寺さん自ら作成する「第六民区広報」で、住民に案内・報告されています。特に「ご苦労様です」「感謝します」の言葉で紡がれ、今年2月で200号を迎えた民区広報には「継続は力なり」を座右の銘とする小野寺さんの地域への思いが込められています。

所属・承認欲求を認めて活かす

小野寺さんは『生理的欲求・安全欲求・所属欲求・承認欲求・自己実現欲求』という心理学の『欲求5段階説』を例に挙げ、「この考えは地域にも当てはまる。誰しも自分が地域の一員であると感じたい（所属欲求）、地域の人たちに認められたい（承認欲求）」という思いを多少なりとも持っているはず。そういう住民の気持ちを受け止め、認めて評価することが、『地域のために何か役に立ちたい、貢献したい（自己実現欲求）』というやる気を後押しし、『共に支え合う地域』に向かう一歩となる」と持論を語ってくれました。

最後に「見て行って」と案内された台町公民館。壁を埋め尽くす様々な活動の写真と、それを説明する少し誇らしげな笑顔がそこにはありました。



大勢が参加する子供神輿

企業紹介



代表 小野寺 忠浩 さん

～基本情報～

- ◆代 表：小野寺 忠浩 さん
- ◆連絡先：〒029-0201
一関市川崎町門崎字所萱 286
- ◆電 話：0191-43-2500
- ◆F A X：0191-43-2675
- ◆E-mail：nandemo@lily.ocn.ne.jp

人と人をつなぐ小さな町の看板屋

地域の「困った」を相談できるという環境

川崎町門崎地内、東山町と干厩町を結ぶ山中に、古い自転車を利用した看板を発見。「どんなことでも、お電話ください」とその看板に書いてあります。

「こんな山奥で分かりづらかったでしょ？今、この仕事（印刷作業）が終わったら話を聞きますから、座ってお持ちください」と声をかけてくださったのは、看板屋・なんでも企画代表の小野寺忠浩さんです。

小野寺さんは、高校を卒業後、市内の看板業者に就職。看板製作に関わる作業のノウハウを学び、人脈も築き上げてきました。平成11年からは地元で個人事業所を立ち上げ、一関市内の各種イベントの看板製作や会場設置、企業等の広報媒体製作のほか、地域のなんでも屋として声がかかれば地域住民とともにイベント等の企画、それに付随する作業にも携わっています。

地域の方々からは「困ったことがあったら、なんでも企画へ相談」と言われるほど、地域に根ざす看板屋ですが、「そんな大それたことではない。繋がりのある各方面の業者や作業をしてくれる人の得意分野を知っているから、そういった方々を繋ぎ、相談に来られた方が納得できるような商品・企画案を提供しているだけ」と語り、「若いころにたくさんの人と出会ったおかげで、今がある。お金ではないんだよね。何かを必要としている人とその何か長けている人を繋ぎ、お互いが『助かったやあ』『よかったよ』と満足していただけるだけで嬉しい」と続けます。

小さな町から全国へ

「全国から注文がある」という、看板製作業務や広報媒体製作。看板屋・なんでも企画の従業員はパートを含め5名で「企業を定年された方や軽度の障がいを持つ方などを含め、地元（近くの）の方々を中心にこれまで採用してきました。みんなそれぞれ得意分野

があり、その達人ですよ」と語り、続けて「こんな山奥だけど、インターネットさえあれば、全国どこの地域の仕事も受けられます。実際の作業場は見たことがないけど、いつも利用してくださるという方もいます。そこ（事務所内の柱など）に貼ってあるシールなんかも企業や各種団体などから依頼を受けた広報媒体です。色や形、バランスなど直接打ち合わせをしなくともデータで確認し、あとは作業場で加工する。そういう仕組みになっています。一度できあがった各種商品は私たちの宝ですから、事務所や作業場内にシールを貼ったり、看板を飾っています」と語る小野寺さん。確かに様々な業種、団体の特徴やイメージが伝わる看板・広報媒体が目に見え込んできます。その中でも一際目につく子どもたちの笑顔写真。「これは、一関市内消防屯所シャッターペイント事業の記念写真。こういった依頼もいただいているんです」と小野寺さん。同社の協力により子どもたちが防災について考えたイラストが、見事、消防屯所のシャッターにペイントされています。

今できることを今住んでいる人の手で

最後に、小野寺さんは企業経営のほか、自治会事務局、川崎まちづくり協議会会員、NPO法人北上川サポート協会、消防団など様々な方面でご活躍。「企業も地域も『次世代にどう残していくか』という点を探りながら継承の在り方を模索しているところが多いと思いますが、私は現実的に今をどうするか、どうしたいかを考えています。微力ながらそのためのお手伝いを企業人として地域住民として今後も支えていきたい」と語っていただきました。



看板屋・なんでも企画の看板

センターの ○○!

各地域特有の文化・風習などを探るべく、当センターでは今年 3 月に各地域の地域協働体にアンケート調査を実施しました。

今回はそのアンケートの設問の 1 つ、「長屋門」についてお伺いした結果を受けて独自調査を行いました。「この写真(右)のような門が地域にありますか?」という設問に対し、34 地域中 29 地域から回答いただき、18 地区で

「ある」と答えており、「ない」もしくは「昔はあった」という回答は 11 地区(無回答含め)でした。



アンケートで使用させていただいた資料写真
宮城県栗原市 長屋門 cafe「いわさき花門」様より

長屋門とは・・・

長屋門(ながやもん)とは、日本の伝統的な門形式の 1 つで、近世諸大名の城郭、陣屋、武家屋敷門として江戸時代に多く建てられました。

諸大名が自分の家臣のために長屋を建て住ませ、その一部に門を開き一棟とした物が長屋門の始まりとされ、名称の由来ともなっています。

武家屋敷の長屋門



門の両側部分に門番の部屋や仲間部屋が置かれ、家臣や使用人の居住に利用していました。

侍屋敷の長屋門は武家屋敷の長屋門より小規模だったそうですが、基本的な構造はほぼ同じでした。

郷村武士の長屋門



農村に居住する武士や苗字帯刀を許された裕福な農家や庄屋でも長屋門が建てられました。このような長屋門では門の両側部分を使用人の住居のほか納屋や作業場として利用されていました。

長屋門＝中門？

長屋門について、各地域の協働体にアンケートをお願いしたところ、長屋門を「中門(ちゅうもん)と呼称している」という回答が半数以上ありました。

実際に長屋門をもつお宅にお伺いし、その歴史や構造を調査する中で、呼称の由来も聞いてみたところ、「中門」というからには、その門を中心として前後に門があったのでは?」など様々な説が。そこで、一関市文化財課へ聞いてみたところ「門の両側部分に馬屋や農機具入れ、農作業スペース、武士階級や裕福な農家などには小作人や働き手(奉公人)の住居などがあり、その間を通るから中門と呼ばれている」という回答をいただきました。

市内の長屋門を調査した中から、長屋門の外観に見られる特徴的な部分をピックアップしてみました。※イラストは長屋門の大まかな特徴をふまえたイメージです。実際には、一関市内の長屋門は左右のどちらかの部屋が馬屋になっているものが多いようです(左写真の長屋門の場合、向かって右側が馬屋)。

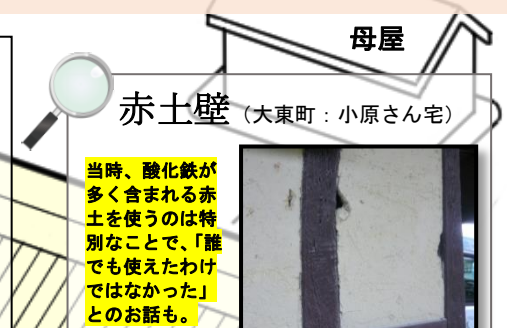


(花泉町:菅原さん宅)



扉 (藤沢町:星さん宅)

現在は扉や敷居(またぐ部分)が撤去された長屋門が多い中、星さん宅の長屋門は扉が残っていました。



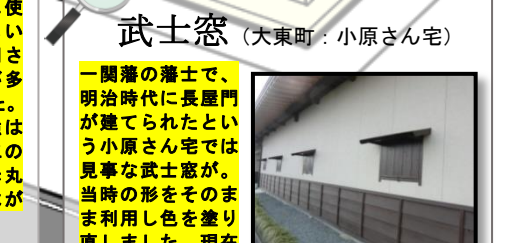
赤土壁 (大東町:小原さん宅)

当時、酸化鉄が多く含まれる赤土を使うのは特別なことで、「誰でも使えたわけではなかった」とのお話も。



栗の木 (室根町:小野寺さん宅)

現代では住宅用には使用することは珍しいような木材が使用されている長屋門が多く見受けられました。リフォームで補強はされていますが、この家の長屋門には赤丸部に丈夫な栗の木が確認できました。



武士窓 (大東町:小原さん宅)

一関藩の藩士で、明治時代に長屋門が建てられたという小原さん宅では見事な武士窓が。当時の形をそのまま利用し色を塗り直しました。現在も開閉します。

また、『大東町の中門』(大東町教育委員会 平成 16 年 3 月発行)によれば、「長屋と門が統合し、家臣の居所や物置になっているのが一般的に長屋門と言われているが、東磐井郡内の長屋門は馬屋としての利用が多かった。仙台藩領域内では、門と馬屋は別棟として屋敷地にあるのが一般的で馬屋と一緒にいる門は全国的に珍しい」と記載されており、「地形的な風土から生まれた葛西時代の小館主的な気概が残っている時代に明治維新となり、裕福な農民層が格式を模倣して流行のように多数建築されたのであった」とまとめられていました。

【気になる中身(構造)は次号へ!】

おしらせ

一関

さくらなみき自閉症美術館 企画展
Kikuko Sugawara

菅原キク子さんの日本画展を行います。日常のありふれた光景の中にある驚きや輝きに満ちた瞬間を、色と形で表現したいという思いで描いた作品の数々を展示いたします。

【期間】平成29年7月4日(火)
～平成29年8月27日(日)

【場所】さくらなみき自閉症美術館
(月曜・祝日休み)

【料金】入館料無料

【問合せ】0191-48-3622(場所と同じ)

一関

バリトン歌手
上野裕之コンサート

桜町中学校出身の上野裕之さんによるオペラコンサートを行います。電子オルガンは千厩町出身の千葉祐佳さん、ソプラノは岩泉町出身の加藤美帆さんが担当し、「カルメン」、「椿姫」より「乾杯の歌」などを演奏。一関修紅高校音楽部の皆さんも特別出演します。

【日時】平成29年8月10日(木)
開場17時30分 開演18時

【場所】一関文化センター中ホール

【チケット】一般2,000円 中高生1,000円

【問合せ】090-4633-4303(上野)

大東

摺沢水晶あんどん祭り

摺沢の商店街を中心に400余りのあんどんが飾られ、まちが幻想的な灯りで照らされます。六角形のあんどんは、水晶の産地として栄えた摺沢の名前の由来にちなんでおり、お盆にご先祖様を迎える迎え火も兼ねている伝統的なお祭りです。

【期間】平成29年8月13日(日)～15日(火)

【場所】大東町摺沢 摺沢商店街

【料金】無料

【問合せ】0191-75-3160、0191-75-2448

(摺沢水晶あんどん祭り実行委員会)

一関

いちのせき市民フェスタ17

市内で活動するおおよそ60の団体・企業が一堂に会し、活動紹介やステージ発表、販売等を行います。スタンプラリーや福引、一関のご当地キャラクター大集合など大人も子ども楽しめる企画や体験コーナーをご用意してお待ちしております！

【日時】平成29年8月27日(日)10時～15時

【場所】なのはなプラザ

【料金】入場無料

【問合せ】0191-26-6400

(いちのせき市民活動センター)

一関

イチコレ(いちのせき市民モデルコレクション)
一般市民モデル募集

いちのせき市民フェスタ17内で開催する「イチコレ」でランウェイを歩く市民モデルを募集します。一関市民を中心に、老若男女、自由な服装・自由な目的でご参加できます。ゲストモデルによるウォーキングレッスンも体験できます！

【日時】平成29年8月27日(日)14時～15時

【場所】なのはなプラザ2階

【参加料】無料 ※要申込(8月18日まで)

【問合せ & 申込】0191-26-6400

(いちのせき市民活動センター)

一関

ヨソモノさんいらっしゃい
「ヨソモノさん VISIT」

他の市町村から一関市へお越しいただいた方(ヨソモノさん)で実際に地域を歩いてみよう！地元の方のご案内で地域を散策しながら、ヨソモノさん目線の気づきやアイデアを地域に活かします！散策の後はランチ交流会を行います。※先着10名、9月1日(金)までにお申込ください。

【日時】平成29年9月9日(土)11時～14時

【場所】弥栄地域内 平沢地区

【参加費】2,000円(交流会での飲食代込)

【問合せ】0191-26-6400

(いちのせき市民活動センター)

川崎

第23回北上川流域交流
E ポート大会

「川との共生」を合言葉に、第23回北上川流域交流Eポート大会を開催します。1チーム10人によるポート競漕で、タイムトライアル方式のレースを2回行います。小学5年生以上の方で構成するチーム、合計60チームを募集します。※運営スタッフも募集しています。

【期日】平成29年9月10日(日)

【場所】北上大橋付近の北上川

【参加料】1チーム 10,000円

【問合せ】0191-36-5666

(北上川流域交流Eポート大会実行委員会事務局)

一関

いまさらナイト
～「NPO法人」の設立から毎年の流れまで～

「今さら聞けない『NPO法人』あるある」と題し、NPO法人の設立の流れや設立後の各種手続き、事業を継続していくための考え方などを改めて確認していきます。

※9月9日(土)までにお申し込みください。

【日時】平成29年9月13日(水)

①9時30分～11時 ②19時～20時30分

※昼・夜の2回開催ですが、内容は同じです。

【場所】なのはなプラザ4階 共同会議室

【参加料】無料

【問合せ】0191-26-6400(いちのせき市民活動センター)

全域

「イマカラ」登録者募集

いちのせきの市民活動スタッフバンク、通称「イマカラ」は、一関市内で開催されるスタッフを募集したいイベントと地域で活動したい人をマッチングする仕組みです。当センターのホームページ内「いちのせき市民活動スタッフバンク」のページから無料のスタッフ登録をすると、スタッフを募集しているイベント情報が随時メールにて配信されます。※登録は18歳以上の方で居住地は問いません。

【問合せ】0191-26-6400

(いちのせき市民活動センター)

今月の表紙



5月に花と泉の公園内「花拓里の館」で開催された「陶芸作家5人展」の様子です。「花拓里の館」は老松の英雄「千葉惣左衛門(農民一揆の統頭人)」の生家を移築し、体験・交流を目的として整備した施設。古民家の雰囲気が作品の魅力を引き立てていました。

Q & A

あなたの「知りたい」にスタッフが答えます

Q

ワークショップの時に聞く「プレスト」って何ですか？

A

「プレスト」とは「ブレインストーミング」の略で、あるテーマについて集団で多くのアイデアを出していくことに特化したワークショップの手法です。「人のアイデアを批判しない」を最大のルールに、思いついたことを全て付箋等へ書き出して発表し、それらを結合したり、さらにアイデアを追加したりすることで、アイデアを増やしていきます。

